

学会ニュース

日本女性学会

第21号 1984年11月

目 次

- 84年度日本女性学会幹事選挙開票結果 2
- 総会分科会報告
 - 両性性についての一考察 船橋邦子 3
 - 移りゆく女役割りと男らしさのジレンマ 福井浅子 6
- 両性具有イメージの創造 溝口明代 9
- 日本女性学会と歴史の巻き戻し 田中由布子 11
- 女性学の見方 大村芳昭 13
- 研究報告会のお知らせ 14
- 寄贈図書・資料 15
- 新入会員紹介 15
- 編集後記 15

'84年度日本女性学会幹事選挙開票結果

すでにお伝えしたとおり、日本女性学会幹事の選挙に伴い、10月13日(土)研究報告会のあとの幹事会(選挙管理委員会を兼ねる)の席上で、開票が行なわれました。

投票総数66票のうち無効票は4票(期限ぎれ2、記載ミス2)でした。

開票結果は、以下のとおりです。

45票	駒尺 喜美	藤枝 濤子	
34票	矢木 公子	33票	亀山美知子
30票	しまようこ	29票	青木やよひ
28票	松原 純子	27票	漆田 和代
26票	桑原 糸子	22票	溝口 明代
21票	井上 輝子	20票	小林富久子、三木 草子
19票	白井 堯子	17票	北沢 杏子
16票	河野貴代美	15票	田中 和子
14票	内藤 和美、三井マリ子、米田佐代子		
12票	渥美 育子、野口 栄子、富谷あつ子、水田 宗子、村上 益子		
11票	田嶋 陽子、船橋 邦子、		
10票	井出 祥子、加藤春恵子、田川 建三、ジェニソン・レベッカ、福井 浅子		
9票	渡辺 和子、	7票	浅野美和子、池田 幸子、雑賀 文香
6票	国信 潤子、高野 フミ、竹中恵美子、田中由布子、プロデリック・キャサリン		
5票	岡沢 澄江、越智 昇、		
4票	足立 恵、天野 寛子、植田智加子、江原由美子、大河内保雪、落合恵美子 岸野 淳子、平川 和子、宮原 忍、安田富貴子、萬 真知子、渡辺 澄子		
3票	沖田 真理、荻野美穂子、河出三枝子、志村 緑、ダグラス・ラミス、 竹原 増子、千葉モト子、鳥居千代香、長谷川イノル、福井美津子、山本有紀乃		
2票	今井 泰子、岡部 初子、クラーク・エリザベス、島木 葉子、高橋ますみ、 高橋みや子、田口 英子、武田まり子、友野 清文、中津川友子、野口美和子 前田 諒子、前原 澄子、三宅 里恵、柳 美代子		

1票 秋山登代子、飯野美佐子、奥田 洋子、小柳 茂子、形井 秀一、金子 幸子
岸沢 初美、木村スチーブン・チグサ、草野美智子、国吉司図子、窪田 信子
小林 普子、柴田 孝子、就室女子大女性学研究会、杉山 秀子、須田 幸子
高島 奈緒、田中 弘子、田沼 良子、寺岡 寿子、新野以志子、平尾 妙子
広川 幸枝、服藤 早苗、松並 綾子、松原 慶、宮沢 邦子、宮嶋 裕徳
村田 鈴子、山口 真、山田 節子、善積 京子 (以上)

この結果に基づき、上位得票者15名を新幹事と認定し、現在交渉中です。幹事の引き継ぎは、12月中に行なわれる予定です。

なお、当該幹事のミスにより先の会員名簿に、以下の方々のお名前が脱落しておりましたのでお詫びいたします。

(お二人に対しては、当該幹事より、御了解を得ました。) エリザベート・ゴスマン、大賀美弥子

両性性についての一考察

船 橋 邦 子

ユング心理学にしる、歴史学におけるアナル学派にしる、西欧の近代合理主義への懐疑と新たな人間観構築にその端を発している。

最近の両者に対する関心の高まりは近代合理主義、欧米中心主義の崩壊を意味するものであり、健康な成年男子を基点としたプラス、マイナスのイメージの価値転換を示唆するものである。

男と女は対立対比のそもそもの原型であり、差別は一方の極が何の検証もなく優越しているという考えに基づいて醸成されてきた。

その男性中心の考え方に対し、女性原理を対置させ、相対化させる中で物事を全体論的(holistic)な見方で捉えていこうとするフェミニズムの新しい潮流が生まれている。

2回にわたる両性具有をテーマとする研究会もこの様な意識にもとづいて出発した。

自分の心の中を支配する二元的なものを自覚化する中でより豊かな心のあり方としての両性具有のイメージを自分の中に構築し、生き方の指針にしたい。

今回の報告は精神分析の経験を通してあるいは神話の中に人間の心は本来両性具有的なものであること、またその精神分析において＜女性原理＞を重視したユングの著作^{〔註1〕}＜男性原理＞＜女性原理＞をその起源において明らかにしようとしたE. ノイマン^{〔註2〕} 神話の表家から男女両性具有を実証したJ. シンガー^{〔註3〕}を読む作業をベースにしたものである。

ユングは数多くの患者との経験から人間にはある共通した無意識のイメージが存在し、このイメージに一定のパターンを与える人間の意志とは無関係な力を元型と名付けた。

認識は経験に先立つイメージがあり、そのイメージパターンが経験を導くと考えた。

アニマ、アニムスというユングの中心的概念はこの元型であり、始源的には両性具有であった心が二分化され、それぞれ男と女の心の内部に異性的要素として潜在していると考えた。つまりアニマはラテン語で「魂」を表わし、男性の中の女性的なものとして無意識に潜在するもの、アニムスはその逆である。

女性的なものとは生命、自然などの原理、男性的なものはロゴスの原理で象徴される。E. ユング「内なる異性」の中でユング夫人は女性がアニムスを取り入れることがいかに重要かを1930年代の女性に説いている。

アニムスは「女らしさ」という社会的、文化的な強制の中で抑圧されてきた為、ロゴスに象徴される判断、勇気、意識など内なる奥底に潜むものを先ず自覚化すること。

アニムスを取り入れるという事はそれによりより高い精神性を獲得することになり自己実現への道であると説いた。

またアニマに身を委ねるということ、意識からの解放は自己のあるがままの姿を受け容れていくことを意味し、そこから創造性や個性が実現すると考えた。

この過程をユングは“in dividuation”と表現したが自己実現 (Self Realization) の意味だけでなく“in - Dividuation”不可分なものとして心の全体性、全体の統一と調和を意味する^{〔註4〕}との解釈もある。

ユングは然しながらアニマに関して、男性の心にある女性の^{イメージ}心像でもありとし、神話の女性を類型化している。これは人格をもたないアニマに具体的イメージを附与する事になり、女のイメージとして固定化される危険性はほらむものである。

事実、思想学が専門領域である男の研究者がこの方法を駆使して書いた論文にふれ、ユング研究の意義について考えさせられることをつけ加えておきたい。^{〔註5〕}

むしろ類型化される女のイメージより、アニマは生命、創造の元型とするなら、その支配を男女が共に受けると解釈するのは誤まりだろうか。

バシュラールは「夢想の詩学」の中でアニマを次の様に語っている。^{〔註6〕}

「アニマはやわらかな実態であり、みずからの統一的なあり方をおだやかに、ゆるやかに享受しようとする実体」であり「明日への躍動を約束しつつ運動を停止している〈眠れる水〉であり、まさに自己充足した内なる自然〈穏やかな女性〉なのである。」

この一節はアニマのイメージを私の感性により豊かに伝えてくれる。

しかしそれではアニマ、アニムスの区別は一体何を根拠にして語られるのであろうか。

E. ノイマン「女性の深層」によれば闇の中から月の光によって生み出された母権的意識は産む性に規定されたものである。

初めに母なる大地は月の光、月の周期性と結びつき農耕文化が生まれ、生命を育むものである。この意識は月によってシンボル化され、豊饒のシンボルとされた。月経周期との関連は古くから伝えられている。

その特色は(1)月依存的 (2)理解とは受胎 (3)体現すること＝月満ちるまで待つこと (4)自然の作用に身を委ねる (5)心の全体性をもってする総体的認知 (6)受け容れ成熟、全体性の中にとり込み、その物と共に成長変化していく。〈女性原理〉の内実を幾分表象しているといえるのではないか。

これに対し〈男性原理〉とされるロゴスの始まりは全ての関係の始まりである母と子の関係において男児が母親に対し“汝との同一化”が誤まりであると解するところから始まる。

つまり自己の存在を母親との関係において意識化することにより客観し、決断をもって断ち切っていく所に男性原理＝ロゴスの原理の起源を見い出せる。

E. ノイマンは母権的意識は父権的意識との抗争の中で弁証的に止揚され、月は日と結びつき、より明るい高い精神性を得たと歴史的にフォローして説明する。

ここで表現されている母権的意識に基づく女性原理は女性の心のあり方の始源のシンボルであることを考え、文化的、社会的に附加価値をつけて固定された〈女らしさ〉と原理として使用する場合の混同を避けるよう心がけたいと思う。

長年身にまわってきた文化的、社会的に規定された衣を一枚一枚剥ぎとることによって自己の内部に見えなかったものを自覚化していく作業と女性であることを差別が現存する以上そのことにこだわりつづけたいと思う。

両性具有は従来二分化されてきたものを弁証法的に止揚するのではなく全てのものを統一、調和することにより豊かな心のあり方と共に、より豊かな人間関係を生み出していく理念として位置づけられるものではないだろうか。

- [註1] E. ユング 「内なる異性」 海鳴社 1976
 C. G. ユング 「元型論」 紀伊国屋書店 1982
- [註2] E. ノイマン 「女性の深層」 紀伊国屋書店 1980
 // 「意識の起源史」 // 1984
 // 「グレートマザー」 ナツメ社 1982
- [註3] J. シンガー 「男女両性具有 I, II」 人文書院 1981
- [註4] 湯浅 泰雄 「ユングとヨーロッパ精神」 人文書院
- [註5] 現代思想 1983 8月 特集「女性原理」
 林 道義 「心の内なる女性性」
- [註6] 現代思想 臨時増刊 1978 「ユング」
 及川 馥 「バシュラールとユング」

「移りゆく女役割と男らしさのジレンマ」

福井 浅子

アメリカにおける女性学の初期の段階は、猛烈な勢いで男社会の見直しが行なわれた。尚、女自身の特質、状態、おかれた現状についてアメリカの殆んど的女性学教育の中でなされてきた。その結果女が変わらなければ、この世の中は変わらない。女が変わることによって、男をもより動かすことができるという立場で行なわれてきた。

しかし一方、女ばかりではない、男に視点をあてることによって、女らしさの変化がよりクローザップされるとして、女らしさと共に、男らしさの研究をも、一部に進められていた。この男の問題をとらえながら実は女の問題にせまろうとするのが、このテーマでもある。アメリカの女らしさと男らしさのイメージが変化し始め伝統的な性役割が疑問視され始めた時代に育った大学4年生を対象とした調査に基づき、「男らしさのジレンマ」をとり上げる。これは、日本における「移り行く女役割」とも深い関係性がある。この大学4年生の男らしさに対する意識調査を見ると、(1) 男らしさの象徴

A) 支配的なもの

1. 男は強く逞しい。

B) 非支配的なもの

1. ヒッピー的なもの

2. 理性的、論理的に物事を考える
3. 男らしい男は常に女性を支配している
4. 女にたよりにされる男

2. 男と女に知的優劣はない。
3. 男と女は対等なパートナー同志の関係
4. 従順な弱い女が頼りにするステレオタイプ

この様に表われている。これまでの男女の性別役割について、従来、男と女の心理的特質は、先天的、根本的に異なるという考え方があり、だから男女の性別役割は、違うのだと考えられてきた。しかし現代の男性にとって、この観念的論拠で、両性の社会的役割は違うのだというアノミー(あいまい)の状態が働く、これは移りゆく女役割りに大いに献言することになる。

また、大学の専攻科目には、女らしくないものがあるか、という問いに対して、女らしくない専攻科目を選択したからと言って、デートの相手に偏見を抱くことはない 48% (フェミニストの答)。伝統的な女らしい科目を支持する 39% (伝統主義者)。残りの 13% はアンビバレンスである。

このアンビバレンスは、同一対象に対して魅力と反感を同時に持って、揺れ動いている状態を言う。これについてアンビバレンスを抱いている学生が「安らぎには退屈があり、喜びには防衛がある」と自分のジレンマを簡単に要約した。ある保守的男性が専業主婦と仕事を持つ妻に対して示したアンビバレントな態度は、「仕事をしている女性の方が主婦よりも面白い」と断言した。僕が女性だったら「仕事をしたいと思うだろう。毎日家の中で同じ事を繰り返しているなんて退屈に違いない。だけどテレビ・コマーシャルに出るようなタイプの女性はあまり尊敬できない」と矛盾したアンビバレンスを示している。

我々が国における伝統的女役割(性別役割分業にもとづく)は、家庭にあって家事、育児をし、舅姑を看、夫にかしづくといった図式で、明治、大正、昭和とへてきた現在「男らしさのジレンマ」がみじんもみられない様に思われる。しかし幾多の社会変動と女性学の登場にともない世界は変り初めた。例えば、この夏、軽井沢の宿舎で大学1年生の男の子のグループと偶然泊り合せた。男の子の中に料理が好きで、野菜の切り方も上手、献立もなかなかのものがある。あなたは料理が上手ねというと、おいしいものを食べるのが好きだから自分で作りたい。だいたい家でもよく作るという。浪人生にも尋ねてみたところ10人に3人は料理を作る。2人は作れない。5人は家族と一緒に作るという。また日本女子大学の家政科に入りたいという青年が現れて、家事に興味があるので学びたいといていた。女の職場といわれる保育園の保育さんの世界に男性が進出し保父さんとして定着している。僕は家事が好きで家にいたいので、外で働く女性と結婚したい、等、随分男の考え方が変ってきたし、特に男の服装が赤いパンツやピンクのシャ

ツとカラフルになってきた。若い女の子の服装の中に男装が多く、使う言葉も荒っぽく男性化し、男女転換の傾向がみられる。

限られた紙面に思う様に盛り込めないくらいがありますが、結論として労働面で考えられることは、国内外を問わず単身赴任が多く、日曜祭日も返上で毎日の残業という猛烈企業人間のあり方を見直す必要がある。1日の労働時間を短縮する。一方労働を男女半々に分担し5時間ずつ働き生活のかてとして、1日8時間労働中残りの3時間は社会奉仕の時間に使う。特に高齢化社会にむけて男女老人共業できるような仕事内容に改革する。

家庭面では、家事の性別役割分業はおかしい。人間、男も女も生きるための基本条件としての自分の家事をし、或いは男女家事役割チェンジをする。

意識面、現代社会の差別的状況にどっぷりつかっていると、一朝一夕には変革しにくい。しかし、天の半分を支える女が差別された低い位置にあることは、男も差別されていることになる。そこで法律上差別的なものは男女差別撤廃条約を完全に遂行されることで変えていながら日常生活の中では、差別的な言葉、例えば主人をB男と名で呼ぶとか、また風呂に女は先に入れないという習慣を打破する、等。一つ一つ実践することである。

最後にアノミーやアンビバレンスな状況はアメリカの男ばかりでなく現在の日本の男達の中にも少しではあるが見られる。女も男も人間という一線上に同列に立つ時、意識革命が陶太され人間役割が成立する。則ち、社会的に無理にゆがめられた性別役割分業に基づく女役割、男役割は必然的に消滅し、社会的人間として平等な中性的人間の役割があるとすれば成り立つであろう。

<以上、6月17日分科会報告より>

両性具有イメージの創造

溝口明代

性の違いが最も顕著に現われるのは、生理的な肉体においてであろう。この肉体の性差を基底にして表象される記号を媒介にして、われわれの文化は構築されている。そして、支配被支配の関係もその記号の差異によって意味を持つものとなっている。

女性の肉体が常に、負の記号を負って登場し、男性の肉体が、力と支配と攻撃にもとづく正の記号として意味を持っている現在、特に、男性の「理想的な肉体」=理想的な男性像の思想的表象として、ボディビルによる男性の肉体創造がなされている時（例えば三島）、女性のアイデンティティーの確立にとって、ボディイメージの問題は、無視できぬものを含んでいると思われる。それ故、女性ボディビルダーの出現は、その思想、心理、社会的意味において注目に値するものであろう。

だが、日本の女性ボディビルダーのある例の場合などは、健康維持、美容的な目的が重視され、動きにも、ポーズにも、伝統的な女性のしぐさ……流れるように円を描くような動線、調和的微笑等がとり入れられて、革新性を見出すことはできなかった。その為に、精神的なもの、思想と肉体とは不自然に遊離し一層「女らしさ」が強調されていた。その結果肉体の創造によっては、性差=負の記号性を払拭することは不可能ではないかと思われもした。

今回、ニューヨークの女性ビルダー、リサ・ライオンが来日し、「ネクスト・ウェーブ・オブ・アメリカン・ウイメン」と題するライブ・パフォーマンスを公開した。

リサ・ライオンは、西武百貨店の84年春夏のイメージ・キャラクターとして採用されて、「アタマもカラダ、カラダもアタマ」というコピーとともに広告紙上に登場している女性である。彼女は1953年生まれ、史上初の女性ボディビル優勝者（79年）、協会の設立者でUCLAで人類学、芸術学、人体学、政治社会学、批評学等を学び、空手、剣道クラブに参加、75年にアーノルド・シュワルツェネガーの野生美に出合い、彼のいるジム「ゴールド」でトレーニングをしたが、チャンピオンであることをあきらまなく思い、82年よりパフォーマンスを行う。「肉体の錬金術」と世界的に高い評価を得ている女性だ。（身長161、体重48、B 94、W 56、H 81、ブラウンの髪と目、Dead Lift = 102 kg、Bench Press = 55 kg、Squat = 120 kg）という肉体の持主である。

アサヒジャーナル（4.13）、BRUTUS（3.15）誌に掲載された写真を見たとき、男女の表

象記号のコードとして二項に分割されている。肉体 — 精神、自然、野性、力、靈力、美、文明、知性、理性、エロチシズム、日常性、虚構等が混在していて、不思議な魅力が現われていた。ただ、写真で見るかぎり、アニムスの表現のされ方が半陰陽的（「男性らしさ」の演出）で、「両性具有」のイメージとは離れているように思われた。ペルソナとアニムスの関係のあり方のテキストとして、今回研究会に提起した。そして以下の意見をいただいた。

女性の肉体の被写体性が抜けていない。主体的に「見せる肉体化」をめざしている。女性の「肉体性へのこだわり」という点を越えてはいない。肉体の重視だ。精神と肉体とは連動し不可分だ。今までの西洋近代の知的概念尊重主義への批判だ。肉体が精神であり、思想なのだ。「女性の肉体」という生物主義から自由であり、それへの批判だ。男女の肉体的一項分離意識を越えてはいない。男女を感じさせないまでに融合すべきだ。リサは、「他者をはねつける肉体」が男性性に行きついた例で、アニムス過剰だ。被視体ではなく能動的肉体であるべきだ。セックスにとられぬ肉体を考えるべきだ。男性的なものは「肉体」で解決し得るか。アニマ、アニムスの問題は、常に状況によって変わる。内的な自己追求のすえには、自己喪失にもなりかねない。等々肉体と精神における二重差別と両性性について意見が交わされた。

私は、次の夜、リサ・ライオンのボディーパーフォーマンスを自分の目で確かめようと、原宿に見に行った。会場に入ると、開演の前から、彼女は過去に見た彫像の中で最高に美しいブロンズの裸像として立っていた。東洋の香が薫り、高田みどりのパーカッションが演じられ、その彫像が呼吸し始め、胸の筋肉が微かに動くまで、彫像がリサ本人だとは気付かなかった。彫像が、所有者であるリサの心理的な動きにつれて、さまざまなポーズ＝意味を象徴し始める。心と連動して、筋肉や血管が美しく現われる。喜怒哀楽、意志、力、自然、生と死、聖と俗、野性と文明、東洋と西洋、あらゆる相対する表象が、次々に表現され混然と融合されて行く。直線的な動きの次の瞬間には、しなやかに、静かに、曲線的に動く肢体。動と止は向かい合い、神秘的で荘嚴な宇宙空間に全てを誘い込んでゆく異次元の創出である。そこには、リサも、女性も男性も人間もなかった。超越した「あるもの」があった。まさに、一つの「両性具有」イメージの創造と見受けられた。

私達の検討と全く異なったものであったのは、私達の検討が静的に切り取られ、写真として機械と撮影者及び雑誌の編集者や読者等のエゴのアマルガムとして創造されたものを通過したテキストによったことにあるのだろう。リサの裸身に俗界のある記号、ハイヒール、ウェーブの髪等何か一つ加わるだけで両性具有性はくずれ、ある文化コードの位置付けの中にピンナップされる。この事は、逆に、男性的なるもの、女性的なるものは人間の所産であり文化幻想にもとづく、（特にペルソナにおいては）に多くの原因があるように思われた。

パフォーマンスは、その空間から、他の創造力への転移に特徴があるという。会場に、男女数人の芸術家による「リサ」像が創出されていたが、どれも、どちらかの性に比重があり、男、女の両性は分断され、同一体の中で相対峙していた。その醜さの中に、現代の文化状況が反映していた。

公演の後に、リサとの語らいが持たれた。生まれ身のリサは、女性的な美しい声の持主でフェミニズムについての考えを聞かれたのに答えて「あなたのフェミニズムの定義は不明だが、日本の「フェミニズム」とは違った考えを持っている。私は何かを創造すること、創造力、創造的に生きることをフェミニズムだと思っている。私は、このパフォーマンスでは、スピリットを大切にしている。演技中は、できるだけいろいろなものを捨て去り、平静を得る事に努力している。今日は最高で、悲しみをすら感じた」と語った。

ブラックボックスの中に潜む「両性具有像」の一つとして、リサの創造は、私のイメージの中に転移された。

《 会員投稿 》

日本女性学会と歴史の巻き戻し

田 中 由布子

日本女性学会の役割は日本の歴史の巻き戻しと5,500万人女性の外的自立の手段になるということである。5,500万人日本女性はまず、精神的に自己を取り戻す必要がある。女性が本格的に太陽を失ったのは、高群逸枝によると縄文・弥生の狩猟・採取時代・農耕時代を経て飛鳥、奈良、平安、鎌倉、室町と過ぎ、封建社会の全盛期、江戸時代であるという。時は過ぎ、その後明治、大正、昭和と女性は生きてきた。この日本女性の大きな目的は歴史的に押しつけられてきた精神史をかわし、それに反撃を加えつつ、原始女性の自由な精神に至るまで歴史の巻き戻しをはかることだと思われる。そこでまず、5,500万人女性は原始女性の地点まで精神的に立ち帰る必要がある。太陽を直接仰ぎ、子供たちを引き連れ彷徨を繰り返していた長い時代からやがて定住し、子供たちとともに農耕生活を営み自分の力で生きていた古代女性の地点まで立ち帰る必要がある。女性はその地点からの記憶を喪失してしまっているのである。太陽を直接仰ぎ、大地を自分の力で耕していた頃から自己の精神生活を喪失させたまま今日に至っている。歴史の前に首をうなだれ、日本史のなすがままに底辺で生きてきた。昭和の現代に5,500万人にまで人口が膨れ上がった女性の地点から日本史が押しつけてきた精神史・思想史の全てを飛び越え、まず

第一に原始女性の地点にまで立ち帰る必要があるのだ。

そしてその原始女性の思想的萌芽につなぐ形でその地点から精神的・生活史的建設を再開するしかないのである。女性は原始女性の段階で自ら鋤をとり畑を耕すという作業をやめてしまったのである。鋤をとる手をやめ日本史の建設の方向に従って底辺でその人生のエネルギーを抜きとられることを許してしまっている。自ら鋤をとり、再び日本列島を自分の力で耕すという作業を開始することによってしか原始女性以降の日本女性史の再開の道はない。自分のために畑を耕すことをやめてしまった女性は原始女性が投げ捨てた鋤を再び拾い上げ、女性独自の方法と計画に従って女性の日本史を再建していくしかないのである。女性のものではない昭和に至る日本史の建設にいつまでも末端でかかずらわっていることはないと思われる。女性の日本史は投げ捨ててしまった自分の鋤の地点からしかなく、縄文・弥生以後、飛鳥、奈良、平安……明治、大正、昭和という歴史は他人のものでしかなかった。女性の日本史としての誇りは自力で建設された歴史建造物の中にしかない。一連の日本史とは他人の道具で、他人の畑を耕し、他人の日本史を作ってきた他人の歴史である。女性の日本史とは他人のそういう日本史の中にはない。

女性の外在的自立は plan, do, see を繰り返しつつ、自己の歴史の守備範囲を固めていくとともにこれまでの日本史との対応関係も守備範囲に入れつつ、その対応関係を徐々に取り壊し女性向きに作り変えていくことだ。

しかし、事実問題として女性は昭和の現代に生きている。そこで原始女性の地点まで手を伸ばすことは実際には不可能である。そこで日本女性学会の活躍が期待される。原始女性の歴史的敗北以降を女性の視点で全て書きなおすのである。そして原始女性以降を全て昭和女性の視界に納めることである。そして原始女性と精神的に手を結びつつ、今歴史の足元で女性が持てる力を全て集計してみることだ。日本史が奇型的に女性に許した持ち物を使って女性の日本史を再建するしかないのである。日本女性学会が整理した女性にとっての政治史・経済史・文化史・教育史……を学習し、自己の現在を認識しつつその地点から方針を立て、目標を定めて現在の日本の政治・経済・文化・教育……の流れを女性向きに変えていくことだ。

かくして女性は日本女性学会が生産した研究成果をテコに原始女性の地点まで精神的巻き戻しを試みつつ、現実には眼前の日本の政治・経済・文化・教育……の動きを読みつつその流れを変え、女性の日本史を建設する主体者として自立しうるのである。

これから女性の日本史を建設する道を選んだ女性は多忙になる。女性は女性のために忙しくなる。女性は日本女性学会の成果をテコに過去を眺めやりつつ、女性の日本史の建設を開始し、それを次代の女性へ橋渡ししつつ未来へ向けてつないでいくことだと思われる。

女性には男性の側の混乱と反撃を恐れずに自己の社会を建設していく勇気があるだろうか。

〈 会員投稿 〉

女性学の見方

大村 芳昭

日本女性学会への入会に際して、現在のところ私が持っている女性学に対する認識の一部を御紹介したいと思います。

第一に、「女性学は裏返せば男性学である」ということです。このような言い方は、いかにも男の囃しさを表すものとして誤解されるかもしれませんが、この次に紹介する第二の点と合わせて、女性学のひとつのポイントを指摘し得ていると思うのです。

私の所属する東京大学女性学ゼミナールにおける議論の中で、性のステレオタイプの機能として次のふたつが提示されました。

1. 人間の行動範囲を、「男の領分」「女の領分」に剰余系的に分割して、それ(性別役割分業)を固定化すること。
2. 性別役割分業において、「男の領分」に対して「女の領分」より高い地位を認め、その価値判断を固定化すること。

私は、このような機能を有するステレオタイプによって男女が分断され、「人間」として共に連帯することができない状況に追いやられていること、これこそが、今後の女性学において最大の克服課題として論ぜられるべきだと思います。即ち、(勿論私としても、過去の歴史の中で、常に男性が女性を搾取してきた事実の重要性は大いに肯定するのですが、それでもやはり、今後の女性学の目指す方向として)単に「男性=加害者」「女性=被害者」と決めつけてしまうのではなく、男性中心社会という基本構造の中で、(女性に対する優越的地位を口実に)男性自身が搾取されてきたことや、女性の側からも男性優位を肯定・推進する動きが常にあったこと等も、副次的にせよ合わせて考察されるべきだと思うのです。

第二に、「女性学が指向すべき理想社会は、女性・男性という性別を超越した『人間社会』である」ということです。

雇用機会均等法案をめぐる論議の中に「保護か平等か」というのがあります。女性が労働において男性と平等に扱って欲しいのならば、保護を撤廃すべきだ、との主張をする人もいますが、私の意見としては、保護と平等は二者択一ではなく、両立する…というより両立すべきものだと思うのです。先に示した主張は、あくまで現状の社会を前提として、女性がそこに参加するなら

そのルールに従え、というものです。しかし、男性中心に形成・運営されてきた社会に女性をそのまま押し込むのは、甚だおかしなことだと言わざるを得ません。現在の男性社会は、先に第一のところで述べたように、男性内部でも搾取を行っている（そしてそのハケ口を女性に求めている）社会であり、男性自身はその矛盾に目覚めねばなりません。女性の社会復帰を推進する為には、女性も男性も共に連帯してつくっていきけるような社会を目標とすべきだと思うのです。

第三に、「女性学は人間を問う学問である」ということです。今まで私たちは、自分のアイデンティティ（identity）を性別にかなり依存してきたのではないのでしょうか。そして、そのことによつて（男性は職場や仕事へ、女性は家事・育児へ、というように）逃げ込む癖のようなものを身につけてしまったのではないのでしょうか。性によるアイデンティティを捨てて自らの力で自分のアイデンティティを探るのは、とても不安で困難なことだと思います。しかしそれは必要なことであり、女性学はその点に目を向けねばならないと思います。その意味で、女性学は人間の強さを問い続ける学問であってほしいのです。

第四に、「女性学は過渡期的学問である」又は「女性学はあるべき学問ではない」ということです。解釈の仕方によっては「反女性学的発言」とも受け止められ得るかもしれませんが、つまり、女性学は社会や学問の（女性的視点の欠落という）矛盾や歪みの中から、それを原因に生まれたのであるから、本来は無い方がよかった、と言いたいのです。そして、その矛盾や歪みを解消すべく、女性学は大いに活動していくべきなのです。

以上、私の一年ばかりの「女性学体験」から得たもの、感じた事を幾つか述べさせて頂きました。私はまだナマイキな一大学生に過ぎませんが、自分なりの道を歩む中で、自分なりに女性学に貢献できれば、と思う次第です。

◎ 研究報告会のお知らせ

テーマ 「新しい歴史学の方法論とその評価をめぐって」

報告者 船橋邦子

日時 12月1日（土）午後1時半～4時

会場 法政大学研究棟7階会議室

国電（総武線）飯田橋駅または市ヶ谷駅下車。川沿いに徒歩約10分。

地下鉄有楽町線市ヶ谷駅下車。

◎ 寄贈図書、資料

男らしさのジレンマ M. コマロフスキー著 池上千寿子/福井浅子訳 家政教育社

福井浅子氏より

期待されるOL像とは — 営業所女性社員に期待される役割について —

(第1回 女性社員グループ研修)

新日本製鉄(株)福岡営業所 官部真紀子氏より

近代日本看護史における看護婦の社会的地位、評価に関する研究

(『看護』1984年6月, 7月, 8月) 亀山美知子 日本看護協会出版会

亀山美知子氏より

婦人展望 '84 8号 市川房枝記念会出版部

同上 '84 9号 //

VOICE OF WOMEN 1984. 9. 8 №53 日本女性学研究会

◎ 新入会員紹介

大村芳昭 東京大学教養学部学生

編集後記

日本女性学会の幹事選挙が初めて行なわれました。132名の会員のうち半数に満たない方々が投票されました。本会会員は、研究報告会等々の参加のほかは誌上での交流の場しかありませんので、相互に知り合う機会も少ないと思います。しかし、この小さな手作りの会をもっと大切に皆で育ててゆきたいものです。

(亀山)

学会ニュースでは、常時、皆様からの御意見レポート等を受けつけておりますので、御投稿下さい。なお、原稿はお返ししませんので、必要な方は、コピーをおとり下さい。

発行 日本女性学会

〒103 東京都中央区日本橋2丁目2番1号

呉服橋共同ビル2F ワールド・カルチャー・サービス内

電話 03-274-1791

郵便振替口座 東京 8-49189
